

## 第13回日口漁業専門家・科学者会議

調査課生物生態研究室長 まやま ひろし  
真山 紘

日本とロシアの両国は、さけ・ます類の保存、再生産、最適利用及び管理のために協力し、このために必要な調査の実施について協力することを両国間の漁業協力協定で取り決めていて、この協力の進め方については毎年春に開催される「日口漁業合同委員会」で検討されています。また、両国の沖合域におけるサンマ、マサバ、マイワシなど浮き魚の漁業の分野の相互の関係については、地先沖合漁業協定にもとづいて設置された「日口漁業委員会」で話し合われています。これら良く似通った名称の政府間協議により付託された問題を協議するため、「サケ・マス、サンマ、マサバ、マイワシ、イカ及びその他の魚種の調査、資源状態及び資源の合理的な利用に関する日口漁業専門家・科学者会議」が毎年秋に日本とロシアで交互に開かれています。

昨年(1997年)は、11月7日から15日までの9日間、ロシア連邦ウラジオストク市において開催されました。日本側からは12名の専門家と科学者が出席し、団長は北海道水産研究所の鶴田資源管理部長が務め、ロシア側からは13名が参加し、団長は太平洋科学調査・漁業センター(チンロセンター)のアクーリン副所長が務めました。

会議は全体会議の他に、「さけ・ます」と「浮き魚」に関わる問題を討議する二つの分科会に分

かれて行われました。さけ・ます分科会は、遠洋水産研究所の石田さけ・ます研究室長が日本側のチーフとなり、水産庁漁場資源課の鈴木資源技術調査官、沿岸沖合課の田垣北洋班長、さけ・ます資源管理センター調査課の真山生物生態研究室長、そして通訳の秀島氏の5名で構成されました。ロシア側からはチンロセンターのマルコフツェフ国際部長をチーフに、カムチャツカ、サハリンの研究所からのさけ・ます研究者と通訳を含む8名がさけ・ます分科会に参加しました。

さけ・ます分科会で話し合われた内容は、科学調査船により実施された共同調査および国内計画にもとづく調査結果、両国の研究機関やさけ・ますふ化放流施設での相互訪問の際の意見交換の結果、アジア系さけ・ます類の資源状態とその変動傾向、両国における人工再生産の概要、1998年および1999年の科学技術協力案等で、1998年に交換し合う情報および資料のリストに関する予備的な検討も行われました。

会議最終日には、「双方は、本会議が実務的雰囲気の中で行われ、また、日口両国の漁業専門家・科学者の漁業調査の分野における科学技術協力をさらに発展させるものであると指摘した。」という記述で締めくくられた議事録を作成し終了しました。

## 第5回北太平洋溯河性魚類委員会年次会議

調査課生物資源研究室長 かえりやま まさひで  
帰山 雅秀

第5回北太平洋溯河性魚類委員会(NPAFC)年次会議が、1997年10月27-31日、カナダB.C.州のビクトリアにおいて開催されました。日本からは、石田審議官を代表とし7名が出席しております。10月29日と31日に今村議長(日本)のもとに本会議が開催されましたが、主な決議事項は次のとおりです：

- (i) NPAFC と PICES との覚え書き(MOU)については、テーブルの上に置いたままとする。
- (ii) 現事務局長の1年任期延長の了承と次期事

務局次長に大森浩子嬢の任命。

(ii) 次期年次会議をほぼ同じ時期にモスクワで開催する。

(iv) 科学研究統計小委員会(CSRS)、取締役小委員会(ENFO)および財政運営小委員会(F&A)にそれぞれ付託した議題の検討結果を承認する。

CSRS が、Loh-Lee Low 議長(米国)のもと10月27-30日に開催されました。主な科学的論議は次のとおりです。



第5回 NPAFC 年次会議の日本代表团

科学研究活動のレビューでは、日本から 19 編、米国から 15 編、カナダから 5 編、そしてロシアから 2 編の科学ドキュメントが提出され、活発な科学論議が行われました。今年は、アラスカ湾におけるエルニーニョ現象の海洋学的影響とサケ科魚類との関係、長期気候変動とサケ科魚類の生産動向との関係に論議が集中しました。サケ属魚類の生残率は、降海直後の海洋生活初期における海洋環境の影響が大きく、結果的にサイズ選択的な死亡がその時期に働くことが示唆されています。また、1997 年は、例えばブリストル湾におけるベニザケの漁獲と遡上が 1978 年以来最低を記録した反面、フレザー川系ベニザケやロシア

産カラフトマスの回帰が予想をかなり上回ったことなど、地域間、種間種内間によりサケ科魚類の回帰量に著しい変動が観察されたことが各国から報告されました。

1996 年に 4 ヶ国により漁獲されたサケ属魚類は、合計 891,465 トン（日本 296,549 トン、アラスカ 409,000 トン、カナダ 31,685 トンおよびロシア 154,231 トン）に及んでおります。また、各国から 1996 年に北太平洋に放流されたサケ属魚類の幼稚魚は、カナダが明らかではありませんが、日本 21.6 億尾、アラスカ 16.4 億尾、ロシア 6.3 億尾の合計 44.3 億尾以上と報告されました。

いくつかあるワーキング・グループ(WG)のうち、系群識別と成長の方法 WG は、使命が完了したことから解散となりました。資源評価 WG では 1996 年の各国におけるサケ属魚類の来遊状況が論議され、近い将来、サケ属魚類の来遊と海洋状態に関するシンポジウムを企画することが合意されました。また、調査方法標準化 WG では、調査方法の標準化が決定されております。

1998 年 3 月にバンクーバーで開催される研究計画調整会議の際、サケ科魚類の生産に及ぼす気候変動の影響に関するワークショップが開催されることが決議されました。また、付託事項は、次回の年次会議までに最終決議をすることで了承されました。

## 第 8 回魚介類の疾病に関する国際会議

調査課魚病研究室長 <sup>のむら</sup> 野村 <sup>てついち</sup> 哲一

1997 年 9 月 14 日から 19 日までイギリス北部スコットランドのエジンバラ市で開催された「第 8 回魚介類の疾病に関する国際会議 (8th International Conference “Disease of Fish and Shellfish)”」に、研究交流促進法の適用を受け私費で参加しました。この国際会議は 2 年毎に、ヨーロッパ南部と北部の地域で交互に開催されるヨーロッパ魚病学会(European Association of Fish Pathologist: EAFP)主催の会議です。多くの民族と言語を持つ国が参加しているヨーロッパ魚病学会らしく、国際色に富んだ会議でした。参加者には私たち日本からの 11 名も含めオーストラリア、アメリカ、カナダ、チリ、アジア諸国など、ヨーロッパに限らず多くの国の魚病研究者が参加していました。会議は広大な構内を持つ Heriot Watt 大学の会議場で開催されましたが、エジンバラはスコットランドの古都でもあり会議を開催する環境としてはすばらしいものでした。この大学は、エジンバラ市街から離れてはいましたが、構内に大規模な宿泊施設を持っており、会議の利用が多

く、この会議の前後にも各種の会議が連続して開催されていきました。会議参加者は希望すると安い費用で大学構内の宿泊施設を利用することができます。宿泊者は食事も大学の学生食堂でとることになっており、まさに寝食をともにしての国際会議であり、そのため言葉の不自由な筆者でも、多くの人と情報交換の時を持つことができました。また、久しぶりに学生寮での学生生活を思い出した期間でもありました。

研究発表は口頭発表が 120 題、ポスター発表が 201 題、6 テーマに関するワークショップと驚くべき発表数と会合がひらかれており、口頭発表も 3 会場で同時に行われていました。

主会場となった Main Auditorium ではスコットランド伝統のバグパイプの演奏に伴われて、会長のショッツフィールドと事務局長が入場する開会式が行われました。これに続いてワット氏から魚を実験動物として使用することについての倫理的、法的側面についての基調講演がありました。ともすれば、魚を安易に実験に使用することがあ